

居酒屋

ほったくり

秋川滝美 Takimi Akikawa

8

目次

黄金色の出汁……………

285

黒豆ゼリーにとけた心……………

211

魔女につかまれた胃袋……………

127

女たちの仕返し……………

67

おじいちゃんの記憶……………

5

サマイロクサノハシロ

十行の海の家

おじいちゃん
の記憶

昼下がりに、東京下町で居酒屋『ぼったくり』を営む美音は、散歩に出かけようと引き戸を開けた。

先週からずっと天気が思わしくなく、もう灰色の空には飽き飽きしていた。だが、今日の空は晴れ渡り、秋の盛りに相応しく深い青を呈している。

美音は日々白んでいくような春の空も好きだが、冬に向けて色を深めていく秋の空も大好きだ。特に、まっすぐに伸びる飛行機雲を見つけたときなど、背景の青との対比が美しく、いつまでも見上げていたくなる。

仕込みも終わった秋の午後、こんなに気持ちのいい一時を休憩に費やせるというのはなんとも贅沢なことだ、とありがたく思いながら、美音はいつもの散歩コー

スである『ショッピングプラザ下町』に向けて歩き出そうとした。

そこにやってきたのは、三日に一度、決まって『ぼったくり』を訪れる常連客のウメだった。

「こんにちは、ウメさん。やっと晴れましたね」

「秋の長雨とはよく言われるけど、本当に久しぶりのお天道様だ。やつぱり青い空を見ると気持ちも明るくなるねえ」

「本当ですね。あら……」

そこで美音はウメが手にしているレジ袋に目を留めた。ばんばんに膨らむほど詰め込まれた袋を見て、にっこり笑う。

「今年のお芋掘りも無事に終わったようですね」

「無事とは言いがいいよ。台風が来てたせいで、ずいぶん遅めの芋掘りになった。まっただらってさ。でもまあ、やっと終わったみたいだね」

「遅くまで土の中にあっただのなら、きっと大きなお芋が穫れたことでしょう」

「どうだかねえ……あたしには去年と変わらないように見えたけどね」

「それは残念」

そんな会話を交わしたあと、ウメはぴよこんと頭を下げる。

「美音坊、いつもいつも面倒なことを頼んで申し訳ないけど、よろしく頼むよ」

「了解です！」

右手を上げて敬礼した美音に、ウメは嬉しそうに笑った。

商店街から少し離れたところにあるあおはずく幼稚園は、園庭に小さな畑を持つていて、毎年六月になると年長組の園児たちがサツマイモの苗を植える。

何本か並んで作られた畝に、ひとり一本ずつ苗を植え、当番を決めて水をやりながら実りの秋を待つ。空の青が濃くなり、雲が鱒の形になるころ、子どもたちは待ちかねたように運動靴を長靴に履き替え、畑に走っていく。

葉や茎の大部分は先生方が予め切っているので、地面から出ているのは数十センチの茎のみ。その茎の根元を、子どもたちは喜び勇んで掘り始める。茎に繋がる根っこを切ってしまわないように丁寧に丁寧に……

茶色の土の中を掘り進み、赤紫のサツマイモを見つけた子どもは盛大に歓声を上げるのだ。園児は毎年入れ替わるけれど、あの歓声だけは毎年ちつとも変わらない、なんともかわいらしい、とウメは目を細める。もちろん、美音も同じ思いだ。親に手を引かれて園に向かう子どもたちの手に、長靴の入ったレジ袋が提げられてみると、ああ今日はいよいよ……とほほえましく見送る。

それと同時に思うのだ。

今日は幼稚園のお芋掘り。それなら、きつと午後にはウメさんが来てくれる、と……



聞くとところによると、あおはずく幼稚園は地域親交に重点を置いているそうだ。昨今核家族化が著しく、祖父母と暮らす子どもは少ない。そんな子どもたちに、少しでもお年寄りと触れあってもいいという思いもあって、あおはずく幼稚園は行事のたびに地域の老人会のメンバーを招く。

七夕やクリスマスのお遊戯会では園児のかわいい歌や踊りを見られるし、園内夏祭りでは園児が打ち鳴らす太鼓に拍手喝采、小さな御神輿と一緒に担ぐ。

秋が来ればお月見団子を、師走になればお餅を、園児とお年寄りが一緒になっ
て作るのだ。

ウメはそんな幼稚園との交流に欠かさず参加、わけても十月に行われるお芋掘り
りを待ちわびている。

焼き芋や蒸し芋にかじりつく子どもに目を細めたり、お客さん用にと保護者が
作ってくれたスイートポテトに舌鼓を打ったり、なんとも楽しい行事なのだそ
うだ。

だが、行事そのものよりウメが楽しみにしているものがある。それは、半年近

くサツマイモを育て、ようやく役目を終えたばかりの茎だった。

園児たちが畑に入る前に切り取られた茎は、たいてい畑の片隅に山積みになれ
捨てられるのを待つばかりになっている。

ウメは毎年幼稚園の許可を得て、その山の中から柔らかそうな部分を摘んで袋
一杯持つて帰るのだ。

「今時こんなものを食べる人はいないかもしれない。貧乏くさい、って言う人も
いる。でも、あたしはこれが大好きでね。店で買えるようなもんじゃないし、農
家にでも頼めば分けてもらえるのかもしれないけど、そんな知り合いもない。

ほんと、あおはずく幼稚園様々だよ」

そう言つてウメは、大きなレジ袋一杯に詰め込まれたサツマイモの茎を、悪い
ね、申し訳ないね、なんてさんざん謝りながら美音に渡す。

今日もウメは、サツマイモの茎が詰め込まれた特大のレジ袋を片手にやってき
た。そして、店に入り、子どもたちと過ごした時間について楽しそうに語ったあ
と、再びすまなそうに頭を下げた。

そんなウメに、美音は笑顔を返す。

「ご心配なく。いつもどおり、ウメさんが食べきれない分はうちでいただきますし、私も大好き。お客さんの中にもこれがお気に入りって人がけっこういらっしゃるんですよ」

「そうかい？ ならいいけど……」

そしてウメはちよつと安心したような顔になって、じゃあまた夜に……と帰っていく。そんなやりとりまで含めて、サツマイモの茎を料理するのは、美音の秋の行事のひとつだった。

「うーん……面倒くさい。せめて、お芋のほうも、もらえればいいのになー」

美音の妹の馨が、呻くように言う。

年に一度しか手に入らない珍しい食材である。ウメにも早く味わってもらいたいし、店にも出したい。ということで、美音は馨にも下拵えを手伝ってもらうことにしたのだ。

馨はサツマイモの茎が嫌いというわけではないが、サツマイモそのもののほうがより好ましいのだろう。

「なに言ってるの。子どもたちが一生懸命育てたものなのよ。幼稚園でおやつに食べて、残った分はおうちに持って帰りたいに決まってるじゃない」

「それはわかってるけどさー。みんな今日は、サツマイモの天ぷらとか大学芋とか作ってもらうんだらうなあ……」

「でしようね」

お芋掘りに来られなかった家族に、『ぼくが掘ったお芋なんだよ』なんて誇らしげに言う子どもの顔が目には浮かぶようだった。

姉妹で顔を見合わせ、ふふつと笑ったあと、馨がまた口を開いた。

「いっそ茎も持っていけばいいのにね。これ、面倒だけどそこそこ美味しいし」

「食べられるものだって知らない子のほうが多いんじゃないかしら。私だって初めて見たときはびっくりしたもの。え、これ、食べるの？ って」

「それこそ、ウメさんとかが教えてあげればいいじゃん」

昔ながらの食べ物とかさ、と馨は珍しくまっとうなことを言う。そんな馨に、美音はクスクス笑いながら、以前ウメから聞いた話を伝えた。

「ずっと前に、一度だけ教えてあげたことがあったんだって」

もう十年以上前のことらしい。ウメも今より若くて元気があったのだろう。子どもたちにあの味を知ってほしいと思つたウメは、芋掘りの翌日、自らサツマイモの茎を料理して幼稚園に届けてみたそうさ。

「へえ……それで？」

「残念ながら、やっぱり本体のほうが美味しいって不評。当然よね、相手は子どもだもの。中には気に入ってくれた子もいたみたいだけど、作り方を教えたなら親御さんたちのほうが面倒くさがっちゃって……」

「あ……確かにね」

よほどあの味が気に入っているか、深い思い入れでもない限り、あれだけの手間をかける気にはならないだろう、と馨は大きく頷いた。

「ということ、ウメさんはそれきり子どもたちに食べさせるのは諦めたそうよ。」

それに、子どもたちがみんな気に入っちゃったら、ウメさんが茎をもらえなくなっちゃうし」

「そっちのほうが困るよね」

「そういうこと」

「ウメさんがもらってきてくれなきゃ、うちだっておこぼれにありつけない。大変大変！」

まだ人參の葉っぱのほうが入りやすいくらいだよー、なんて言いながら、馨はせっせとサツマイモの茎を掃除する。

ハート形の葉っぱを取って、茎の皮を一本一本剥いていく。ちょっと露を剥く作業に似ているのだが、これがけっこう面倒くさくて、ウメは自分ではもうやりたくないのだそうさ。

「ウメさん、『昔は庭でサツマイモ作って、自分で料理したんだけどねえ……』って、いっつもすまなそうにしているわ」

それでも、剥いた茎を胡麻油ごまあぶらで炒め、醤油しょうゆとみりんで味を付けたきんぴらは独

特の味わい。年に一度きりしか食べられないこともあって、どうしても諦められないのだ、と言う。

「あたしも聞いたよ。『年を取るって嫌だね。それまで平気でやってきたことがどんどん億劫おっくうになってき。掃除だって料理だって本当に面倒になっちまう』って、言ってたね」

これで相手でもいれば別なんだろうけど、自分だけのためとなったらねえ……と、少し寂しそうに笑ったウメの姿を、姉妹はよく覚えていた。

ウメはしばらく億劫になったあれこれについて語り、やがて話題はあおはずく幼稚園のお芋掘りに招かれた話に移った。

『お芋掘りに行ったら、畑の隅に美味しそうな茎が捨てられていたんだよ。あたしはあれが大好きなんだけど、もう皮を剥むいて料理する根気がなくてね……』

『あー……お芋の茎……きんぴらにすると美味しいですよ。それなら、うちで引き受けましょうか？』

そんな会話がきっかけで、その翌年から、ウメは幼稚園からもらってきたサツ

マイモの茎を『ぼったくり』に置いていくようになったのだ。

料理したサツマイモの茎をふたつに分け、片方をウメに、もう一方を『ぼったくり』で出す。それを見た常連たちは、『お、ウメ婆ばあのおこぼれだな』とほっこり笑うのだった。

+

——見かけない子ね……

美音がその男の子を見た第一印象は、そんなものだった。

馨とふたりでせつせとサツマイモの茎の皮を剥むき、きんぴらに仕立てた。ふたりがかりでやったおかげでなんとか散歩の時間が残り、美音はやれやれと引き戸を開ける。

いつもどおり『シヨッピングプラザ下町』に行こうと歩き出したとき、店の脇にある電柱近くに所在なげに立っていたのが、その男の子だった。おそらく今年

小学校に入ったぐらい、親の付き添いなしに外で遊ぶことをようやく許された年齢といったところだろう。

——もしかしたら、近くの店に入っている誰かを待っているか、あるいは友達と待ち合わせでもしているのかしら……

知らない大人が声をかけて怯えさせても悪いし、そもそも『知らない人に声をかけられても返事をしてはダメ』などと、学校や親から指導を受けている可能性が高い。寂しい話ではあるが、子どもを狙う不届きな輩が多い昨今、身を守るためには仕方ない。そう思いながら、声をかけることもなく通り過ぎた。

美音が『ショッピングプラザ下町』から戻ってきたときには、その男の子はもういなかった。友達が来たか、家に帰ったのだろう。

ところが、開店時間が近くなり、店の前を掃除するために出ていった馨が戻ってきて首を傾げて言う。

「お姉ちゃん、なんか子どもがいるんだけど……」

馨が戸惑いがちに口にした台詞で、美音は昼間の男の子を思い出した。

「一年生ぐらいの男の子？」

「たぶん。ちっちゃい子の年ってわかんないけど……」

「薄いブルーで長袖のTシャツを着てなかった？」

「あ、そうそう、その子」

「じゃあやつぱりあの子だ……。私が散歩に出かけたときにもいたのよね……」
てつきり家に帰ったとばかり思っていたけれど、また戻ってきたらしい。

秋の日はもう落ちかけている。家に帰ったほうがいい時刻なのに……と氣になった美音は、店の外に出てみた。

引き戸が開いた音で、はっとしたように男の子が美音を見た。目が合った瞬間、男の子は口を開きかけ、しかし言葉を発しないまま黙り込む。

どうやら美音、あるいは『ぼったくり』に用があるらしい。となると放置もできず、美音はやむなく声をかけた。

「うちになにかご用かしら？」

走って逃げるべきか、返事をすべきか……

男の子はしばらく迷っていたようだったが、意を決したように口を開いた。
「サツマイモの茎……」

いかにも小さな子どもにありがちな、目的の言葉だけの台詞せりふだった。

『誰が』でもなければ、『なんのために』でも、『どうしたい』でもない。出てきたのは、名詞だけ。

「サツマイモの茎が欲しいの？」

「お店にある？」

「うん。あるわよ？」

美音の答えを聞いて、男の子はポケットから小さな財布を取り出した。

アニメヒーローのイラストのついたコインケース。それを美音に差し出して、蚊の鳴くような声で言う。

「ください」

真っ赤なコインケースと男の子の顔を交互に見比べて、美音はふっと笑った。

「じゃあ、お客さんね。とりあえず、お店の中に入って」

お客さんだと認められて安心したのか、男の子は黙ったまま美音についてくる。お客さんといってもまだ店も開けてないし、うちは原則、未成年のお客さんはお断りなんだけど……と心の中で思ったことは内緒だった。

「馨、御新規さんよ」

「あれ……？」

そんな声を上げ、馨はまじまじと男の子を見た。もちろん、さっきまで店の前で様子を窺うかがっていた子だと気付いているのだろう。姉がなぜ、彼を店内に招き入れたのかわからず戸惑っているに違いない。

「なにか飲み物でも……」

昨日までと打って変わって、今日は天気がよく、空気が乾いている。子どもは汗を掻かきやすいし、きつと喉が渴かわいているだろうと考えた美音は、とりあえず飲み物を勧めることにした。

冷蔵庫の中身をざっと見て、自分たち用に入れてあったアイステイーを取り出

す。

「桃の香りの紅茶、飲む？」

「あ……うん……」

男の子の返事に頷き、美音はアイステイーを小さめのグラスに入れた。一方、馨は、まあお座んなさい、なんてウメみたいな口調で男の子をカウンターに誘う。はいどうぞ、とグラスを渡すと、男の子はごくごくと元氣よく飲み始め、ほどなく飲み干してしまった。やはり、相当喉が渴いていたらしい。

グラスをカウンターに置くのを待ちかねたように、馨が声をかける。

「えーっと……とりあえず名前を覚えてもらってもいい？ あ、でも嫌ならいいよ」

馨は、名前を知ってたほうが呼びかけやすいし、と言いつつに言う。おそらく彼女も美音同様、昨今の子どもに指導されている『知らない人との接し方』を気にしたのだろう。

「ハルキ」

姉妹の心配をよそに、男の子は一瞬きよんとしたものの、すぐに名前を口にした。まだ、誘拐などといった危険に無頓着むとんちやくなのかもしれない。

「了解。じゃあ、ハルくんだね。ハル君は何年生？」

「二年生」

——一年生、もしかしたら幼稚園かも……と思つてたけど、二年生だったのね。それにしてもこれぐらいの子つて、みんなこんなに言葉が少ないのかしら。

美音はちよつと首を傾げてしまう。美音が知っている子どもは裏のアパートの早紀さき姉弟とシンゾウの孫のカノンぐらいだけれど、彼女たちはもう少し多弁だった。とはいえ、それは人それぞれ、ハルキはとりわけ無口なタイプなのかもしれない。

「で、二年生のハルくんは、どうしてサツマイモの茎が欲しいの？」

幼稚園の子どもの評判は今ひとつだったとウメは言っていた。ハルキはそれよりもひとつ、ふたつ年上ではあるけれど、サツマイモの茎の熱狂的ファンだとは考えにくい。そもそも食べたことがない子のほうがずっと多いだろう、と不思議

に思いながら美音は訊いてみた。

ハルキは、どう答えていいかわからないといった顔で、一生懸命言葉を探している。言葉が見つからなくてだんだん焦っていく様子が伝わってくる。見かねた馨が声をかけた。

「ゆっくりでいいんだよ。まずね、そのサツマイモの茎は誰が食べるの？ ハルくんかな？」

「違う」

「じゃあ誰かにあげるの？」

「おじいちゃん」

「おじいちゃん？ おじいちゃんはサツマイモの茎が好きなの？」

「わかんない」

そこで馨は、うーん……と眉を寄せ、かがみ込んでハルキと目の高さを合わせた。

「わかんないのか……それは、困ったね。それでも、ハルくんはおじいちゃんに

食べてほしいんだよね。どうしてだろう？」

「だって……おじいちゃんずっと『サツマイモの茎、サツマイモの茎』って言うてるんだもん」

そこでようやく、ハルキの口から複数の言葉が出てきて、美音と馨はほっとする。だが、ほっとしている場合ではない。事情は半分もわかっていないのだ。

馨は引き続き事情を訊ねる。

「うーんと……ハルくんは今、おじいちゃんと一緒に住んでるの？」

「うん」

「おじいちゃんの年はわかる？ いくつぐらいかな？」

「知らない」

そりゃそうよね、と美音は思う。

一緒に住んでいる家族の年齢をはっきり答えられる小学二年生の男の子は、そんなにいないだろう。どうかすると両親の年齢だって怪しいものだ。馨もそう思ったらしく、質問の形を変えた。

「ハルくん、干支^{えと}って知ってる？ 申^{さる}とか酉^{とり}とか、聞いたことない？」
 「わかんない。でもこの前ママが『おじいちゃんは今年ペーじゅのおいわいだ』って……」

「ペーじゅ……？ 色かな……」

「馨、色じゃなくて、八十八歳でお祝いするほうじゃない？」

「あ、米寿^{べいじゅ}のお祝いか！ 八十八歳なんだ……お元気で何よりだね」

馨の言葉を聞いて、ハルキはひどく困った顔になった。何をそんなに困惑しているのだろう、と美音は首を傾げる。もしかして、ハルキの祖父は病気ののだろうか……

「ハルくんのおじいちゃん、どこか具合が悪いのかしら？」

「ぼけちゃったんだって」

「ぼけちゃった……？」

「なんでも忘れちゃうって、ママが言った」

認知症が始まっているのだろうか。年齢からすれば決しておかしくはない。

身体が丈夫なままに認知症が始まると、確かにまわりは皆困った顔になる。

どこも悪くないのに、記憶がどんどん消えていく。家族の顔も忘れるし、食事をしてもし食べたこと自体を忘れてしまう。

外に出かけても家に帰る道順を忘れ、排泄や睡眠のリズムが狂い、昼夜が逆転。家族はその対処に困り果てる。

おそらくハルキはそんな両親の顔を思い出して、自分も困った顔になっているのだろう。

「もうすぐ『かいごしせつ』ってどこにいくんだって……」

パパがそう言ってた、と呟いたあと、ハルキは泣きそうな顔になった。

美音と馨は顔を見合わせてため息をつく。

以前、『ぼったくり』の客であるノリが、沖繩の祖父のことを心配して相談を持ちかけてきたことがあった。だが、ノリの祖父は認知症とはいえ、初期も初期。介護サービスの助けを得ながら、まだまだひとりで生活ができる状況だった。ハルキの祖父はそこからさらに症状が進んでいるのだろう。

家族は介護に疲れ果て、もう一緒には住めないと判断したに違いない。なんと
も切ない話だった。

「お父さんとお母さんは、お仕事をしつらっしやるの？」

「せんせい」

「ふたりとも？」

「うん」

ああ、それは厳しい。あまりにも厳しい状況だ……

美音はさらに気が重くなる。

昨今の教員は激職だ。昔だってそうだったのだから、最近は特に、子どももその親も意識が高いというか、とにかく難しい。学校にまつわるあらゆることに時間を取られ、自分たちの家族のために割ける時間はどんどん減っていると聞く。そこに介護の必要な認知症の親を抱えては、仕事はおろか、生活そのものに支障を来す。

仕事への責任感と年老いた親の介護。そのふたつを天秤にかけるなんて間違っ

ているとわかっていても、あえてそれをしなければならぬ。そして、苦渋の選択で介護施設を選ぶ。

介護施設はどこも入所待ちの長い列ができていく。受け入れ先があったこと自体がラッキーなのだ、自分たちの至らぬ介護を受けているよりもそういう施設に入ったほうがずっと厚い介護を受けられるのだと、自分たちに言い聞かせて……ハルキの家族の事情はわかった。だが、それとサツマイモの茎の関連性は未だに不明だ。馨は諦めることなく、ハルキから答えを引き出そうとしていた。

「それで、どうしてサツマイモの茎なのかな？」

「何が食べたい、って聞いたらサツマイモって……」

介護施設に行く前に、せめて好きなものを食べてもらいたい——
そんな思いから、家族は祖父に好物を訊ねたのだろう。

「ママ、いろいろ作ったんだ……」

「焼いたり、蒸したり？」

「天ぷらとか……あと、なんかお菓子みたいなの……」

「スイートポテトとか大学芋かな？ バターが入ってたり、甘いタレがついたり……」

「あ、うん、そういうの……」

『サツマイモ』という答えが返ってきたため、焼き芋や蒸し芋、天ぷら、唐揚げ、スイートポテトや大学芋、きんとんに芋ようかんに至るまで、およそ考えられる限りのサツマイモを用意したのだろう。けれど、そのいずれにも、ハルキの祖父は首を横に振ったらしい。

「もう考えつかないってママが言って、それでおじいちゃんが『クキ』って……」
それで家族は、ハルキの祖父が食べたいのはサツマイモそのものではなく茎なのだと察した。だが、茎だと聞いた家族はもつと困り果てた。

サツマイモの茎なんて店で売っているものではない。ハルキの両親もなんとかならないかと努力はしたに違いないが、やはり手に入らなかったのだろう。

おじいちゃんの介護施設の入所日は迫る。せめて家にいる間に好きなものを、食べたいものを食べさせてあげたい。それなのに、おじいちゃんが一番食べたいも

のは手に入らない。

「それでどうしたの？」

「ぼくが知ってたの」

「サツマイモの茎があるところ？」

「うん。学校」

「あ、そうか……理科でやるよね！」

確かに、このあたりの小学校ではサツマイモの栽培をする。美音も馨もやった記憶があった。

ハルキの言葉で、小学校の教員をしている父親は、四年生が理科の授業でサツマイモを育てていたことを思い出したそうだ。

だが、学校に行けばサツマイモの茎がある！ と家族が顔を輝かせた次の瞬間、父親ががっくりうなだれたという。

「なかつたんだって」

ハルキの父曰く、十月に入ってすぐに四年生たちが大騒ぎで芋掘りをしていた。

大きい、小さい、太い、細いと、それぞれが掘った芋を比べ合っていたし、給食のメニューにも入れられていた。先週のことだから、もう茎は処分されているだろう。

近隣の小学校にしても幼稚園にしても、たいてい十月早々に芋掘りを終わらせる。だから、今年はどうどこも終わっているはずだ。農家を探し出したところと同じだろう、と両親が話していたようだ。

「でもぼく……」

「諦められなかった？」

「そうなの」

家庭環境から想像すると、小さいころからハルキの世話をしてきたのは祖父母なのだろう。

ハルキにしてみれば、いつもそばにいてくれたおじいちゃんとおばあちゃんだ。おばあちゃんの話は全然出てこないから、今はおじいちゃんだけなのだろうが、とにかく一緒に遊んだり、勉強を見てくれたり、おやつを用意してくれたりした

人なのだ。

認知症になって、いろいろなことを忘れてしまったからといって、ハルキがおじいちゃんのことを忘れたわけじゃない。大好きなおじいちゃんのために、なんとかサツマイモの茎を探したい。

そんな気持ちがあっても不思議ではなかった。

「ぼく、探したんだよ」

学校が終わってから、あちこちを探し回った。もしかしたらどこかの学校に残っていないか、庭に生えていないか、と目を皿のようにして探した。その結果、ようやくあおはずく幼稚園の園庭に残っているサツマイモを見つけたのだ、とハルキはちよつと自慢げに言った。

それを聞いて美音は、ウメの話を思い出した。

「そういえば、予定していた日が台風と重なって、お芋掘りがずいぶん遅れたってウメさんが言ってたわ」

おそらく、今年のおおはずく幼稚園のお芋掘りは、この界限で最後だったに違

いない。最後の芋掘り、最後のサツマイモの茎……ハルキはそれを見つけたのだ。
「いつ見つけたの？」

「昨日」

「誰かに知らせた？」

「パパとママ」

夕食の席でハルキから話を聞いた両親は大喜び。早速、明日にでも園に頼んでみると言ってくれたそうだ。

「でも、やっぱりなかったの」

ハルキの目から涙が零れこぼそうになっていた。きつと、そのときの失望を思い出したのだろう。

幸い今日は小学校の先生たちの研修会があるそうで、給食を食べて下校になった。

家に飛んで帰るなり、あの幼稚園に行ってみたのに、畑にはもうサツマイモはなく、茎もなかった。

「タッチの差で、掘られちゃったってわけか……」

「朝一番で茎を切って、袋に詰めてゴミ収集に出しちゃったんでしょうね」

サツマイモの一本の苗から育つ茎はかなり長い。畑全体ともなればけっこうな量になるし、園庭にいつまでも置いておくわけにもいかない。朝一番で茎を切って、ウメが持ち帰りそうな分だけを残して処分したに違いない。

せっかく見つけた最後のサツマイモだったのに、と泣きそうになっていたとき、目の前を大きなレジ袋を持ったおばあさんが通った。袋には、なんだかツルのようなものが入っている。

あれはもしかして……!? と思ったハルキは一生懸命そのおばあさんを追いかけて、『ぼったくり』に辿り着いた。

おばあさんは店の中に入り、しばらくして出てきたときにはもう袋は持っていない。なかった。

この店は食べ物屋さんみたいだし、おばあさんに譲ってもらうよりもお金を出して買えるならそのほうが簡単かもしれない。

急いで帰って自分のお小遣いが入っている財布を持って戻ってきたものの、店に入る勇氣はない。かといって帰るに帰れず、ずっと様子を窺_{うかが}っていた——一語ずつしか進まないもどかしい会話の果て、ようやくハルキから聞き出したのはそんな事情だった。

「はあ……ハルくん、すごいよ。よくそれだけひとり考えられたね」
馨がひどく感心している。

言葉はものすごく——もしかしたら年齢以上につたないのに、頭の中は随分しっかりとっている。男の子ってこういうものなんだろうか……と美音と馨は本当にびっくりしてしまった。

「それで、おじいちゃんにサツマイモの茎を持って行ってあげたいのね？」

そう言った美音に、ハルキは大きくこっくり頷いた。

「よくわかったわ。どれぐらいあればいいのかしら？」

美音に訊_きねられ、ハルキはまた赤い財布を差し出した。

「これだけ……」

美音はその財布をじっと見た。

お腹が空いた子どもに自分の顔を差し出して食べさせるヒーローが、力強く拳を突き出している。

ハルキはそのヒーローのように、自分の身を削ろうとしていた。

お小遣いが入った、大事な財布。小銭ばかりかもしれないが、けっこう膨らんでいる。もしかしたら、ほしいものがあつて貯めていたのかもしれない。この財布からお金を出させるなんてできるわけがなかった。

ところが、美音の困ったような視線をハルキは逆の意味に取ったらしい。

「足りない……？」

また泣きそうになっているハルキの頭をくるくると撫で、美音は言った。

「お金はいらないわ」

「でも、知らない人からものをもらってはいけません、ってパパもママも先生も!!」

そこだけやけにすらすら言うところを見ると、日頃から何度も言い聞かされて

いるのだろう。

「やっぱりね……と思いながら、美音はサツマイモの茎のきんぴらを小さな使い捨て容器に詰めた。その一方で、馨に指示して、メモ用紙に『ぼったくり』の連絡先と美音の名前を書かせる。

そして最後に、両方を紙の手提げ袋てさきに入れた。

「このお店の連絡先を入れておくから、お父さんかお母さんに見せてね。それで、ここに電話してくださいって伝えて。したら、どうしてこういうことになったか説明してあげるから」

美音の言葉に馨が追加する。

「ハルくんはちゃんと説明できると思うけど、お母さんたちもそのほうが安心するから」

親と子どもとの両方に接する機会が多い教員夫婦なら、子どもは時として、自分に都合のいい説明しかしない場合があることを知っているはずだ。

それが故ゆえに、我が子の説明に不安を覚えるかもしれない。それに、どこの誰か

らもらったかわからない食品を口にするのは怖いに決まっている。

「お忙しいところ申し訳ありませんが、なるべく早く早く電話してください、って伝えてね。したらおじいちゃんにも早く食べていただけから」

勝手におじいちゃんに食べさせちゃ駄目よ、と念を押して、美音はハルキを店の外に送り出した。

もう本当に暗くなる寸前だ。急いで家に帰さないと、と焦る気持ちが大きかった。

「じゃあね、ハルくん。気をつけて帰ってね」

小さな紙袋を提げ、大きく手を振ったあと、ハルキは飛び跳ねるように帰っていった。

ハルキが店をあとにしてから一時間半後、『ぼったくり』の電話が鳴った。

店は既に開店、サツマイモの茎を楽しむにやってきたウメが、いつもの焼酎しょうちゆうの梅割りを一口呑んだところだった。

ハルくんのおうちの方かしら……と思いながら受話器を取ってみると、礼儀正しい挨拶が聞こえてくる。

「お忙しい時間に失礼いたします。私、真田と申しますが……」

続けて、息子が大変お世話になりました、という言葉が聞こえる。やはり電話の主は、ハルキの母親だった。いかにも学校の先生らしい、落ち着いたしつかりした話し方である。だが、その声の裏に、あまりにも怪しげな店の名前に戸惑っている様子が窺えた。

「お店を開ける準備をされていたのでしょうか？ そんな時間に、うちの子が面倒をおかけして、本当に申し訳ございませんでした。開店に間に合わなかったりなんてことは……」

「大丈夫ですよ。そんなに面倒だってことありませんでしたし」

既に出上がっていた料理をお裾分けしただけだ、と言う美音に、ハルキの母は、ためらいがちに続ける。

「でも……あの子から話を聞き出すのは、大変だったんじゃないやありませんか？」

その言葉から、彼女の常日頃の苦労が偲ばれた。きつと、ハルキの言葉のつたなさを詫げる機会が多いのだろう。確かにハルキは語彙が少ないように見える。

だが、彼が何も考えていないかと言えば、決してそうではない。むしろ、少ない言葉の端々から聡明さが滲み出ているように美音には思えた。

「正直、最初は戸惑いました。でも、こちらが訊ねたことにはちゃんと答えてくれましたし、問題ありません。というか……ハルキくんは、すごくしつかりした考えを持っていますよね」

『しつかりしている』ではなく、『しつかりした考え』と強調するように言った美音に、ハルキの母親の声が少しだけ明るくなった。

「ハルキは、自分が考えていることを説明するのが本当に下手なんです。家族は慣れているから不自由しません。初めて会う方だと特に難しいみたいで……上手く話せないと本人も焦りますし、余計に伝わらなくなってしまうんです」

よくぞ、根気よくあの子の話を聞いてくださいました、と電話の向こうで頭を下げた気配が伝わってきた。

「ハルキくんは、おじいちゃんのことを大好きなんですわね」
 「生まれてからずっと、ハルキの世話は舅しやくうと姑しやくこに任せきりだったんです。本当によく面倒を見てくれて、あの子もすごく懐いていました。それなのに、こんなことに……」

私が仕事をしていなければ、うちで介護することもできたかもしれないのに、とハルキの母はまた沈んだ声になった。

ハルキの話の中に、『おじいちゃんはパパのパパ』という説明があった。ハルキの母親から見れば舅ということになる。おそらく、介護施設に入所させるにあたっての心理的な壁は相当なものだっただろう。認知症は確かに進んでいるが、自分が仕事さえしていなければ、まだまだ家にいってもらえたかもしれない、と今なお自分を責めているに違いない。

——ノリくんのお祖父さんの問題を聞いたばかりなのに、またこんな話を聞くなんて……

美音は改めて介護問題の身近さを感じながら、慰なぐさめるような声を出した。

「差し出がましいことを申しますが……あんまりご自分をお責めにならないほうがいいと思いますよ。私の父がよく言ってたんですけど、人には与えられた仕事があるんだそうです」

「与えられた仕事……?」

「ええ。真田さんの場合、それは学校で子どもにいろいろなことを教えることなんじゃないでしょうか。今までに、真田さんが先生として教え、導いたお子さんはたくさんいるはずです。同じように介護施設でお年寄りの世話をするのが仕事という人もいます。それぞれが、それぞれに与えられた仕事をするために、他の人に仕事を任せる。それでいいと私は思うんですけど……」

「そうでしょうか……」

「おそらく。真田さんも旦那様も、おじいさまを思う気持ちをちゃんとお持ちで、なんとかサツマイモの茎を探そうと努力されたんでしょう? ハルキくんはそれを見ていたからこそ、自分も探さなきゃ、って頑張ったんだと思います。ご両親の姿がそうさせたんですよ」

「……そうかもしれません」

「だから、大丈夫です。おじいさまはきつとわかってくださいます。あとは、それぞれが自分の仕事を頑張つて、時間が許す限りおじいさまに顔を見せてさしあげれば……」

「そうですね」

電話の向こうで、ハルキの母親はしばらく美音の言葉を噛みしめるように黙っていた。

自分より明らかに年下である美音の、わかったような言葉に反発を覚えても不思議ではない。それなのに、彼女はちゃんと受け止めてくれたようだ。

それは、子どもの生意気な理屈を聞き慣れ、それでも聞き取るべきはきちんと言き取ってきた教師ならではの姿だろう。美音にはそんなふうに思えてならなかった。

「本当にありがとうございます。気持ちになりました。それで……」

代金をお支払いしたいのですが……と続いた母親の言葉を、美音は笑って否定

した。

「ご心配なく。それ、元々無料ただなんです」

「と、いうと？」

「うちの常連さんが幼稚園からいただいてきたんですよ。その方はサツマイモの茎のきんぴらが大好きで、この時期になるとうちでお引き受けしてきんぴらを作ることになってるんです」

「なんてこと……お客さんからいただいたものを横取りしちゃったんですね……」

しかも好物を……と彼女はこの世の終わりのような声を出す。

きつと、ものすごく真面目な先生なんだろうな……と、美音はハルキの母親にさらに好感を抱く。

ここはひとつ、何が何でも安心してもらいたい。そんな気持ちで、美音は極めて明るく言った。

「大丈夫です。サツマイモの茎、けつこうたくさんありましたから」

「そうですね……？」

「ええ、大きな井にいっぱい。好き嫌いが分かれやすいものでもありますし、残っても困ります」

「でも……」

「いいんです。そもそも、あれは子どもさんたちが育てたサツマイモ。いくら捨ててしまいう予定の茎だといつても、それで商売するのはさすがに気が引けます。だから、サツマイモの茎のきんぴらはうちの店ではサービスマニユーなんです」
 実のところ、無料で得たもので商うことはいくらでもある。

人參の葉もそうだし、ウメが毎年大豊作にするゴーヤもそうだ。けれど、さすがに子どもが育てたものはためられる。馨とも相談した結果、ウメが持ち込んできるサツマイモの茎は、『好きな方はいくらでも』ということで、鉢ごとカウンターに置くことにしたのだ。手間がかかるのに一銭にもならない。ウメがいつも悪いね、と繰り返し返すのもそのせいだった。

「どうかお気になさらないください。もしも、おじいさまが気に入ってくださいたら、来年もお裾分けします。連絡先を教えてくださいれば、作ったときにお知ら

せしますよ。来年も、再来年も、その次の年も、ずっとずっとお元気で、召し上がっていただけるといいですね」

「はい……本当に……」

美音の言葉に声をつまらせながら、ハルキの母親は自分の電話番号を告げる。今度、お店におじやまさせてください、と言い添えて彼女は電話を切った。

「はあ……よかった!」

カウンターの隅に置いてある電話が鳴った瞬間から、話の成り行きに耳を澄ませていた馨が安堵の息を漏らした。ところが、ウメはなぜか複雑な顔をしている。焼酎しょうちゅうの梅割りもちつとも減っていないなかった。

「どうしたの、ウメさん?」

と、美音が訊いてみると、ウメはちよつと切なそうに言った。

「いやね、あたしももつと年を取ってほけちゃったら『サツマイモの茎』って言うのかと思ってさ」

「頭も身体も元気なウメにそんな日がくるなんて想像できなかった。けれど、こればかりは誰にもわからない。美音に言えることはひとつだけだった。」

「もし、ウメさんがそうなくても、ちゃんとお届けしますよ。それこそ毎年、毎年、あおはずく幼稚園の園長先生にウメさんの分だってお願ひして」

隣で大きく頷きながら、馨も付け加える。

「あたしが届けるよ！ あ、もちろん焼酎しよちゆうの梅割りと一緒に！」

「馨、梅割りはどうなの？」

「あーいいねえ、梅割りとサツマイモの茎のきんぴら。それならばけても安心だ」

「うん、安心安心！」

「えーっと、ごめんなさいウメさん、何が安心なのかしら？」

「さあ……なんだろう？」

三人はそこで大笑いし、ウメはまた小皿に少しだけサツマイモの茎のきんぴらを取る。

そして、この胡麻油ごまあぶらの香りも……と本当に美味しそうに口に入れた。

十

「ところで、これはなに？」

カウンターのの上に置かれた大ぶりの鉢を見て、要かなめが訊たずねた。ちなみに、鉢の中身はほとんど残っていない。いつもどおり要は閉店間際に来店し、常連たちが散々食べて帰ったあとだからだ。

「なんだと思われませう？」

「なんだと訊かれても……露かきみただけけど今は季節じゃないし、小松菜とはちよつと違うし、見当がつかないな」

「ご覧になったことあると思いますよ。学校とかで……」

「学校？ いやもう、全然わからない。降参！」

「やけにあっさり諦めますね。実はこれ、サツマイモの茎なんです。好きなお皿にとつてお召し上がりください」

自分で好きなだけ取る、という見慣れない提供方法を不思議に思った要は、美音から説明を聞いて驚いた。

「サツマイモの茎……しかもサービスなの？」

「ええ。召し上がったことおありですか？」

「いや……ない。でも、確かに学校で見たな」

知識として、食べられるということは知っていたが、食べたことはおろか、料理されたものを見たのも初めてだった。

「だと、思いました。もうあまり残ってませんけど、よろしければお試しください」

「ああ。でも……これ……」

旨いのか？

そんな言葉が顔に浮かんでいたのだろう。美音はクスリと笑って答えた。

「美味しいのか、ですか？ さあどうでしょうね……。うちのお客さんたちは気に入ってくださってますけど……」

そして美音は、もう最後ですから……と残り少なくなった鉢の中身を全部小皿

に移し、要の前に置いた。

——サツマイモの茎ねえ……

要は小皿の上の料理をマジマジと見つめた。

サツマイモの茎は戦時中、食べる物がなくてやむなく食用にされたと聞いたことがある。おそらく、美音が味について言及しなかったところを見ると、大して美味しくもないのだろう。積極的に食べたいものじゃない。

でも……と要はなおもサツマイモの茎を見て考える。

『ぼったくり』で不味いものが出されたことなどない。だからきつとこれも旨いはず。素材がどんなものであれ、美音の手にかかれば大変身なんて日常茶飯事……

そう判断し、要は箸でつまみ上げたきんぴらをえいやつと口に突っ込んだ。

「あ……胡麻油だ」

「要さん、お好きでしたよね？」

「ああ。それにこれ、すごくしゃきしゃきしてる！」

思わずそう言ってしまうほど、サツマイモの茎はしっかりとした食感を残して